アリストテレスの自然哲学におけるパイノメナ

松浦和也

1．アリストテレスの「パイノメナ」

人間が過去の人物の思想を理解せんとするとき、ひとつのアプローチ法はある特定の思想にコミットするか否か、たとえば「人間は生まれつきアプリオリに知識を持つか否か」「市民は革命権を所持するか否か」「外界の存在を認めるか否か」といった哲学的疑念をその人物が残したテキストに投げかけることであろう。

他方、これとは別のアプローチ法は、その思想家がその結論に至った道筋、すなわち方法（μέθοδος）に着目することであろう。この観点から眺めると、アリストテレスの著作にはまさに方法そのものを語る文言が数多く残されている。たとえば、『魂について』第１巻第１章は魂と生物を考察するための方法が記述されているし、また、『カテゴリー論』『命題論』をはじめとするいわゆる『オルガノン』的著作はそのすべてが学問である限り追従すべき一種の方法を扱うものだと評価することも可能であろう。

さらに進んで、その方法の特色に注目すると、そのひとつに経験主義的な要素を挙げることができる。たとえば、『分析論後書』第１巻第１８章をはじめとした議論において、エパゴーゲー（ἐπαγωγή）、通常「帰納」と訳される手続きを彼が強調することは、個別的で経験的な事例の集積が原理的な知をもたらすという知識モデルを提示している。また、『形而上学』第１巻第１章で表明される、感覚から知識（ἐπιστήμη）に至る知の階層性にも一種の経験主義的知識観を見出だしうる。さらには、『分析論前書』第１巻第３０

章の以下の記述を加えることもできる[1]。

> 各々の知識に関してはそれらの大多数は各々に特有である。それゆえ、経験が各々に関する原理を提供できる。ここで私が述べることは、たとえば、天文学的な経験が天文学の知識における［原理］を［提供できる］、ということである。実際、パイノメナが十分に把握されたときに天文学的な論証が発見された。また、他のいかなる技術や知識においても同様である。（*An. Prior.* I 30, 46a17-22）

個々の学問分野、とりわけ自然哲学的知識に関する原理を提供するのは、その学問分野に関わる経験（ἐμπειρία）である。天文学の場合、われわれが天文学的原理を獲得しえたのは、太陽や惑星に関する経験、あるいは「パイノメナ」（φαινόμενα）を十分に把握したことによってである。一般化すれば、個々の学問の始原を提供するのは、経験や観察事実、あるいは現象の収集である。この方法は、科学的手法の一端として今日でも継承されているものだろう。

ただし、この理解が妥当であるのは、「パイノメナ」を観察事実や物理現象と必ず同一視できる場合である。実のところ、アリストテレスが用いるパイノメナは一義的に理解することが困難な用語である。「パイノメナ」の曖昧さは、すでに紀元３世紀のアフロディシアスのアレクサンドロスが『アリストテレス「天体論」注解』において示唆している。彼はパイノメナを「そう見えるもの」（ὁρώμενα）と接続すると同時に、「そう考えられるもの」（δοκούντα）にも接続している[2]。また、実際にパイノメナを「そう考えられるもの」を指示すると解するしかない箇所がある。もっとも有名な用例は『ニコマコス倫理学』第７巻第１章のものであろう。この個所の「パイノメナ」は「エンドクサ」（ἔνδοξα）、すなわちあるトピックについて人々が持つ通念を指示するように思われる。

このようなアリストテレスのパイノメナ概念の曖昧さと、彼が様々な著作

で展開した哲学的論法に関して、もはや古典と言える論文が G. E. L. Owen の *'Tithenai ta Phainomena'* である。Owen はパイノメナに観察事実や物理現象としての経験的パイノメナと、通念としての通念的パイノメナの二種があることを強調した上で、２つのそれぞれのパイノメナに独立した２つの論法があると示す。すなわち、一方が経験的パイノメナに立脚した経験科学的論法であり、他方が通念的パイノメナに立脚した問答法的（dialectic）論法である。

この Owen の分析はさまざまなアリストテレス研究の方向性を示唆している。ひとつの方向は『ニコマコス倫理学』をはじめとした倫理学的考察や『政治学』等の政治学的考察、さらには『自然学』や『生成消滅論』等の自然学的考察においても見出される問答法的方法の詳細な解明である[3]。これらの著作には、あるトピックに纏わる既存の通念を集積して概観し、その通念に対し批判を行うことを通じて問題を発見し、自身の見解を開示するという議論手順が共通して見られる。

もうひとつの研究の方向性は、通念的パイノメナによる論法に考察対象を限定せず、パイノメナによる論法の一般的解明を目指すものである。たとえば、Iwin はパイノメナの二義性とエンドクサの位置づけに関して Owen の解釈に修正を加えつつも、パイノメナによる論法に経験科学的論法と弁論術的論法の二種を認める点では Owen と軌を一にしている[4]。他方、Owen 解釈に対して挑戦的な解釈を Nassbaum は提示している。彼女は、ある特定の信念や科学理論から自由な、いわばいかなる理論的負荷を持たない「観察」の概念をアリストテレスが持っていた証拠はないと主張し、Owen が挙げたパイノメナの二義性を拒否する[5]。この理解では、彼自身のものを含んだいかなる理論に対しても中立的であるべき「観察」という意味はパイノメナから消失することになる。

しかしながら、アリストテレスの自然哲学的考察の中でパイノメナが果たした役割を見る限り、やはり彼のパイノメナには２種類があり、さらに、これら２種類のパイノメナは異なる役割を与えられている。本論文はこの点を

確認した後、この２種類のパイノメナのさらなる相違を考察し、最後に特に自然哲学的著作においては経験的パイノメナと通念的パイノメナに階層構造が見られることを示したい。

２．パイノメナの意味と役割

ギリシア語のパイノメナ φαινόμενα は動詞 φαίνεσθαι の現在分詞中性複数形である。そして、動詞 φαίνεσθαι は Liddle & Scott の *A Greek-English Lexicon*（以下 *LSJ*）によれば、「明らかになる」（come to light）や「これこれのように見える」（appear to be so and so）を意味する動詞である。それゆえ、この動詞の現在分詞である φαινόμενα は、字義的には「明らかになるもの」や「これこれのように見えるもの」を意味し、必ずしも観察事実や物理現象を意味しない。ただし、*LSJ* はアリストテレスが用いる φαινόμενα および φαίνεσθαι には２つの意味を認める。第一の意味は「感覚的経験に明らかであること」であり、第二の意味は「心的に明らかであること」である。

前節で引用した『分析論前書』第１巻第３０章のパイノメナは前者に該当するように思われる。もし、『分析論前書』でアリストテレスが具体的に想起している天文学とはプラトンが『国家』第７巻 528e-530b で語るような、太陽や惑星の動きを数学的モデルによって説明する天文学であり、プラトンの意向を継いでエウドクソスやカリッポスが作り上げ、アリストテレスが『形而上学』Λ 巻第８章で訂正を加えたような天動説（あるいは同心天球説）であるならば[6]、天文学の出発点となるパイノメナとは、人間が心に思い描く天文学的事柄よりも、むしろ太陽の季節に応じた動きや、火星や木星の順行逆行といった物理現象の観察であると思われる。このような理解が正しいならば、Nassbaum のパイノメナ理解とは異なり、理論的負荷を持たない、あるいは理論的負荷が軽微なパイノメナをアリストテレスに認めることはできるだろう。

他方、*LSJ* の言う「心的に明らかであること」に近似する用例であり、さ

らにアリストテレスの哲学的方法を示す記述として多くの解釈者が着目するテキストが『ニコマコス倫理学』第７巻第１章中の以下の文章である。

> さて、他の場合と同じように、パイノメナを提示したうえで、問題点を提示して、この［アクラシアという］状態に関するすべての通念、そうでなくても最大数で最有力な通念を正当化せねばならない。仮にすべての難点が解消され、通念が残されるならば、十分に正当化されたことになるだろう。（*NE.* VII 1, 1145b2-6）

この引用は、ある行為を行うことが悪いと知りつつ、その行為を実際に行ってしまう状態であるアクラシア（ἀκρασία）、「自制心のなさ」を考察するための手順を述べている。すなわち、a) アクラシアに関わるパイノメナを提示し、b) アクラシアに関わる問題を取り上げ、c) その問題の解決を通じて通念を正当化する。b) には『ニコマコス倫理学』第７巻第２章が対応する。該当箇所で、アリストテレスは、ソクラテスの見解である[7]、悪いと知っていながら自制心のないことを行うことはありえない（NE. VII 2, 1145b27-28）という主張を問題点として取り上げる。そして、この見解に対抗して、c) 悪いと知っていつつ自制心のないことを行うことがいかなる意味でありうるのかが『ニコマコス倫理学』第７巻第３章で論じられる。

さて、『ニコマコス倫理学』第７巻第１章におけるパイノメナを観察事実や物理現象と解しがたい理由は、単純に a) に該当するテキストが観察事実を提起していないからである。引用に続くテキストは「抑制や忍耐が賞賛すべきものである」をはじめとした、アクラシアに関わる６つの考えを挙げる。これらの考えをアリストテレスはパイノメナとして挙げているが、その内容は動詞「思われる」（δοκεῖ, 1145b8）や「述べる」（φασίν,1145b17, 18）、「言われる」（λέγονται, 1145b19）で支配されている。そして、これらのパイノメナをアリストテレスは総括し、「これらが言われていること（λεγόμενα）である」（*NE.* VII 1, 1145b20）と締めくくる。このように、『ニコマコス倫理学』

第７巻第１章におけるアクラシアに関するパイノメナは、たとえば自制心のない人の行動といった観察事実ではなく、アクラシアについて人々が考えている内容のことである。そして、この意味でのパイノメナとは、通念すなわちエンドクサ（ἔνδοξα）とほぼ同義に用いられていると思われる。通念とは、『トピカ』第１巻第１０章 104a8-12 に即せば、ある事柄に関して人々や賢者たちが語る内容である[8]。それゆえ、『ニコマコス倫理学』第７巻第１章のパイノメナはまさにアクラシアに関する通念に他ならない[9]。

このように『ニコマコス倫理学』第７巻第１章 1145b2-6 は、観察事実や物理現象とは同一視しがたいパイノメナの一用例を示している。同時にこのテキストは、パイノメナによる論法において通念的パイノメナが果たす役割のひとつを提示している。すなわち、真に妥当な見解とは通念的パイノメナを正当化する力がなくてはならない[10]。逆に言えば、通念的パイノメナはある見解が妥当であることを保証するもののひとつとして機能する。このようなパイノメナの役割は『天体論』第１巻第３章にも見られる。

> 理論（λόγος）がパイノメナの証人となり、パイノメナが理論の証人となるように思われる。（*Cael.* Ⅰ3, 270b4-5）

この引用はパイノメナと理論の間には二重の関係があることを示している。これらの関係は次のように整理できよう。第一に、パイノメナから帰納的に原理や一般的理論が獲得される。第二に、それら原理や一般的理論から個々のパイノメナが結論として導出される[11]。前者の関係は『分析論前書』第１巻第 30 章 46a17-22 で、後者の関係は『ニコマコス倫理学』第７巻第１章 1145b2-6 で表明される関係である。

なお、この『天体論』第１巻第３章のパイノメナは通念的パイノメナと感覚的パイノメナのどちらも含むものであるように思われる。引用に続くテキストでは、まず、ギリシア人も非ギリシア人も神的な対象を上方の場所に割り当てていることをアリストテレスは紹介する（270b5-11）。この内容は通

念的パイノメナに該当するだろう[12]。他方、この紹介に続いて、恒星が変化しないことを彼は紹介する（270b11-16）。こちらは感覚的パイノメナに該当するだろう[13]。すると、この引用は感覚的パイノメナであれ、通念的パイノメナであれ、原理や理論の正当性を検証する役割がパイノメナに求められていることが確証できるだろう。

３．検証手段としてのパイノメナ

もし、引用した『天体論』第１巻第３章 207b4-5 におけるパイノメナが通念的パイノメナと感覚的パイノメナを包括するならば、Nassbaum が提示するように、該当箇所はパイノメナによる論法が同一の構造を有することを示唆する。しかしながら、アリストテレスの用いるパイノメナには、少なくとも程度差があることは指摘せねばならない。

この点を確証するために、2）検証手段としてのパイノメナの性質に着目しよう。パイノメナが検証手段として用いられる仕方は２通りありうる。第一に、ある原理や理論を正当化するために、その原理や理論とパイノメナが一致することを確認する、あるいは原理や理論からパイノメナを導出可能であることを示すことである。『ニコマコス倫理学』第７巻第１章 1145b2-6 で通念的パイノメナに与えられた役割はこの役割である。自制心のない行為を説明できるような行為モデルや認知理論が通念的パイノメナを説明できるならば、その行為モデルや認知理論の妥当性は保証されるだろう[14]。

また、感覚的パイノメナにも同様の役割が期待されていることは、『動物発生論』第３巻第１０章に見出すことができる。この章でアリストテレスはミツバチの発生、特に女王ハチと雄ハチの間の交尾が観察されないのに、どのようにして女王ハチと雄ハチが発生するのかを論ずる。彼の回答は、女王ハチは女王ハチ同士の交尾によって発生し、雄ハチは交尾することなしに女王ハチから発生する。彼の説明は、もちろん彼の時代には女王ハチと雄ハチの交尾は上空で行われるという観察事実が認知されていなかったことによる

誤った理論である。しかし、注目したいのは、この理論の提示を締めくくる際に、理論とパイノメナの関係に彼は言及するテキストである。

> 理論（λόγος）からも、ミツバチに生じると思われることからも、ミツバチの発生は先のような形であるように見える。ただし、［ミツバチに］生じることは十分に把握されてはいない。いつか把握されるとすれば、その時は理論よりも感覚を信じるべきである。理論を信じるのは、その理論がパイノメナと一致することを論証した場合である。（*GA.* III 10, 760b27-33）。

アリストテレスが提示した理論はミツバチの発生に関するパイノメナを説明することができる。その限りで、彼の理論は正当である。ただし、この主張によってアリストテレスは将来における理論を破棄する可能性に言及している。その破棄は、Bolton が適切に指摘するように[15]、ミツバチに関する通念に加え[16]、ミツバチに関する感覚的パイノメナが発見された場合、その感覚的パイノメナと理論を整合させるために成される。

すると、『動物発生論』第３巻第１０章は、a) 提示した原理や理論に正当性を与えるためのパイノメナに加え、b) 理論や原理を反証するためのパイノメナも示している。このような役割は『天体論』第３巻第４章により明晰な形で見出すことができる。

> これに加えて、不可分な物体を主張することで数学的知識に反さなければならなくなり、また、通念や、感覚に関わるパイノメナも否定せねばならなくなる。（*Cael.* III 4, 303a20-23）。

この引用は古代原子論に対する批判の一節である。古代原子論が主張するそれ以上分割できないような最小の物体を否定すべきなのは、数学的知識や多くの通念に加えて、感覚に由来するパイノメナと対立するからである。同

様の立場は『天体論』第３巻第７章にも見出すことができる。アリストテレスはエンペドクレスやデモクリトスの説を彼らが「パイノメナについて語りながら、パイノメナと一致しないことを語る」（*Cael.* III 7, 306a5-7）と批判する。さらに、彼が『自然学』第４～で空虚の存在を否定するとき、その論拠は空虚の概念を前提すると物体速度の速さ遅さといった感覚的パイノメナを説明できないことにある[17]。『形而上学』Λ 巻第８章において、エウドクソスの同心天球説に修正を加え、天球の数を増やしたカリッポスの天球モデルを大筋においてアリストテレスが採用するのは、エウドクソスの同心天球説は火星と木星の逆行を説明できないからである。もし、ある自然哲学的原理や自然哲学的理論が感覚的パイノメナを説明できなかったり、感覚的パイノメナと相反する帰結を導いたりするならば、そのような原理や理論は却下しなければならない[18]。

通念的パイノメナと感覚的パイノメナはどちらも、それらと原理や理論を照らし合わせることによって、原理や理論を正当化したり、批判したりする機能を有する。ただし、ここで指摘すべきは、通念的パイノメナと感覚的パイノメナの間には、求められる役割にも程度差が認められることである。『ニコマコス倫理学』第７巻第１章では、アクラシアに関するすべての通念的パイノメナと自身の理論をアリストテレスは整合させようとはしていない。彼が提示した行為モデルや認知理論が説明すべき通念的パイノメナは一部のものにすぎない。この態度に対し、『動物発生論』における感覚的パイノメナはより強い真理性を期待しているように思われる。アリストテレスは、対象に関する感覚的パイノメナの集積が不十分な状態から成立した理論や原理は誤謬を含みうると考えている。そして、新たな観察事実が発見され、その観察事実と既存の理論や原理が衝突する時、却下すべきはその観察事実ではなく、理論や原理である。ある理論や原理は必ずしもあらゆる通念的パイノメナを説明する必要はないが、あらゆる感覚的パイノメナを説明しなければならない。このような程度差が生じる理由のひとつは、通念的パイノメナは偽を含みうるのに対し、感覚的パイノメナは基本的には真とアリストテレスは

認めているからであるように思われる。

4、パイノメナの階層構造

さらに、通念的パイノメナと感覚的パイノメナの間にはある種の階層性が認められる。この点を確証するために、アリストテレスの『自然学』第４巻第１～５章の場所論におけるパイノメナの役割を考察しよう。場所論は『自然学』をはじめとした自然学的考察で導入されるパイノメナが感覚的パイノメナではなく、通念的パイノメナであることを証明するために Owen が具体事例として挙げる議論である[19]。

『自然学』第４巻第１章 208b8-209a2 においてアリストテレスは場所の存在を示す４つの根拠を挙げる。水と空気の相互置換（ἀντιμετάστασις）（208b1-8）[20]、単純物体すなわち四元素の自然運動（208b8-25）、古代原子論への言及（208b25-27）、そしてヘシオドス『神統記』に対する言及（208b29-209a1）である。Owen によれば、これら４つの論拠は 208a1 および a5 の「思われる（δοκεῖ）」が示しているように、場所に関する感覚的パイノメナではなく、場所の概念に関して人々が考える通念的パイノメナである。そして、２番目から４番目までのパイノメナにアリストテレスは正当化を加えていない[21]。それどころか、３番目のパイノメナに含まれる空虚の存在については後の『自然学』第４巻第６～９章の空虚論で否定する。このようにアリストテレスは通念的パイノメナをすべて正当化する必要を認めていない。この点は『ニコマコス倫理学』第７巻第１章で表明された通念的パイノメナに対する態度と同様である。

『自然学』場所論に限らず、他の自然哲学的考察においても、アリストテレスの考察の出発点のひとつが人々の持つ通念的パイノメナの集積であること[22]、通念的パイノメナに対する批判的検討から哲学的問題を発見していることは否定できない。ただし、場所論におけるパイノメナの役割には修正が必要である。この修正とは、Nassbaum が主張するように、アリストテレス

のパイノメナは感覚的パイノメナと通念的パイノメナのどちらも包括する概念だということではない。彼の場所論（および自然学的考察）は通念的パイノメナの批判検討を議論の基盤におきながらも、他方で感覚的パイノメナを欠いて成立するものではない、ということである。

場所論において場所が存在する第一の論拠は、水と空気の相互置換という物理現象である。この物理現象自体は感覚的パイノメナに分類される。そして、場所論において相互置換自体はアリストテレスの積極的な議論の中に組み込まれている[23]。それゆえ、相互置換という現象には彼の信頼があり、この現象を基盤のひとつとして彼は場所論を構築している。また、第二の論拠に含まれる単純物体の自然運動という感覚的パイノメナも『自然学』の議論の基盤として用いられている。

それゆえ、アリストテレスの自然学的考察が問答法的に進行するとしても、議論の細部で用いられるパイノメナは通念的パイノメナのみではない。感覚的パイノメナは論証の基盤として議論の基盤として役割を担っている。その限りで、自然哲学的考察は強い真理性を有する感覚的パイノメナがあって初めて成立する。

ここからさらにわれわれはもう一歩踏み出すことができる。『自然学』の場所論において、場所が存在すると人々が考える通念的パイノメナの由来は、水と空気の相互置換という感覚的パイノメナに由来する。また、『分析論前書』第１巻第３０章が示すように、学問上の原理や理論は感覚的パイノメナの集積によって生まれたとしよう。もし、通念的パイノメナが一般的な人物の見解からエンペドクレスやデモクリトスといった自然哲学における専門家の見解までも含むのであれば[24]、彼ら哲学者の自然哲学上の見解も感覚的パイノメナに基礎を持つ。事実、『自然学』第４巻第６章において古代原子論が空虚の存在を要求する論拠をアリストテレスが紹介するとき、場所的運動、物体の圧縮、生物の成長増大および灰が水を吸収するという現象を彼は典拠として報告する。もちろん、古代原子論自体は通念的パイノメナに該当するだろう。だが、古代原子論が依拠する現象は感覚的パイノメナである。さらに、

この古代原子論に対抗して空虚の存在を否定するために、アリストテレスはこれらの現象が生じることを否定することによってではなく、その現象を説明するのに空虚概念が不必要であることを示すことによって空虚の存在を否定する。

以上のように、少なくとも自然哲学的議論においては、感覚的パイノメナと通念的パイノメナの間には、前者を基盤として後者が初めて成立するという階層構造が見られるのである。

５．結論

以上の考察から得られたことを確認しよう。パイノメナに通念的パイノメナと感覚的パイノメナの２種を認めた場合、以下の２つのことが明らかになった。第一にアリストテレスはそれぞれに異なる真理性を期待していたことである。通念的パイノメナは偽でありうる、つまり理論や原理によって正当化できない場合がありうるのに対し、感覚的パイノメナは基本的に真であり、そのすべてを理論や原理は説明する必要がある。第二に、自然哲学的領域においては、パイノメナ間に階層構造がある。すなわち、通念的パイノメナは感覚的パイノメナの集積によって成立するという構造を持つのである。

ただし、以上の整理はアリストテレスの哲学的方法のごく一側面に過ぎない。彼の方法の解明のためには、人間が原理や理論を獲得する過程において感覚的パイノメナと経験、そして感覚に成立する関係を考察せねばならないだろう。さらに、本論が提示したパイノメナによる論法の理解が仮に正しかったとしても、この理解が自然哲学的考察を超えて、倫理学的考察や政治学的考察にどこまで適用可能かという問いは生まれるだろう。これらの課題については、機会を改めて考察したい。

［本文注釈］

1 『動物部分論』第１巻第１章には次のような文言も見られる。「すでにのべたように、まず各々の［動物の］類に関わるパイノメナを把握し、次にその原因を述べるべきである」。（*PA*. I 1, 640b13-15）

2 Alexandros, 33.

3 たとえば、Renon や Hamlym の考察が挙げられる。

4 Iwin, 129.

5 Nussbaum, 272-275. なお、Anagnostopoulos は動物学的著作を元にして、パイノメナの原意を観察や経験的観察に由来する事実や現象だと指摘する。ただし、この指摘をそのまま『ニコマコス倫理学』の用例に適用することは困難である。

6 Cleary, 63-65. Wians, 135-136

7 正確には、プラトン『プロタゴラス』で表明される見解である。

8 同様の見解は『分析論前書』24b11 を参照。

9 『ニコマコス倫理学』のパイノメナをエンドクサと解する点については Owen に始まる理解ではない。すでに、Stewart, 120-121 や、Burnet, 291 がこの箇所のパイノメナを通念と関係づけて述べている。cf. Gautier, 588.

10 『エウデモス倫理学』第１巻第６章 1216b28 以下も参照。

11 Cleary, 70.

12 ὑπόληψιν（270b6）

13 τῆς αἰσθήσεως（270b12）、φαίνεται（270b15）

14 同様の立場は『ニコマコス倫理学』第７巻第１４章にも見られる。身体的快楽に高い価値を見出す大衆の通念に批判を加える際に、次のような方法論をアリストテレスは語る。「われわれは真実を述べるだけではなく、誤った見解の原因も指摘せねばならない。そうすれば確信も高まるからである。すなわち、真ではない見解が真に見える理由に納得のいく説明を与えうるならば、それによってわれわれは、真実をいっそう確信できるようになる」（*NE*. VII 14, 1154a）。身体的快楽に価値を認める大衆の見解を批判するだけではなく、身体的快楽に価値を認める見解がいかなる意味で妥当な説明を与えることは、アリ

ストテレスの快楽論が正しいことに確信を与える。

15 Bolton, 62.

16 δοκούντων（760b29）

17 215a25-26 で物体の速度の違いは媒体の違いに原因があると語るとき、彼は εἰμί「〜である」ではなく ὁρῶμεν「われわれは見る」を選んでいる。

18 *cf.*『天体論』第 3 巻第 7 章 306a1-7

19 Owen , 87-88.

20「場所が存在することは相互置換から明らかだと思われる。つまり、水が今あるところから、容器からのように水が出ると、次に空気が入る。またあるときにはその同じ場所に別の何かしらの物体が占める。ゆえに、それ［水があった場所］は入ってきたものが何であれ、入れ替わったものが何であれ、それらとは異なるものだと思われる。なぜなら、その中に空気が今あるもののうちに以前は水が入っていたのだから。それゆえ、この場所やこの場は、ものがその中へ動き、ものがそこから動くものだが、空気とも水とも異なることは明らかである」（*Phys*. IV 1, 208b1-8）。

21 4 番目のパイノメナであるヘシオドス『神統記』における（アリストテレスによる解釈を通じた）場所の見解は、場所は物体から離存し、実体性を持つ対象であるばかりではなく、万物が存在する根源でもある、というものである。ただし、ヘシオドスの見解におそらくアリストテレスは賛同していない。なぜなら、ハッセイが指摘するように、アリストテレスが場所を存在の根源として扱っている様子が場所論には見いだせないからである。Hussey, 101-102. 2 番目のパイノメナである四元素の自然運動の扱いについては論争がある。該当箇所のパイノメナによれば、単純物体の自然的移動は、場所が存在することのみならず、場所が何らかの力を持つことも示唆する。自然的移動の概念自体はアリストテレスの自然哲学的宇宙観、いわゆる自然的場所（natural place）と関連することは明白である。しかし、後に彼は場所がいかなる意味でも原因ではないという疑念を提起する（*Phys*. VI 1, 209a18-20）。そして、この疑念に解決を与えないからである。それゆえ、場所をアリストテレスは質料因、形相因、目

的因、作用因のいずれの意味でも原因と見なしていないと解することも可能である。場所の原因性に関する近年の論争の整理は、Algra, 150-151 を参照。

22 『自然学』第１巻第２章、第３巻第４章、第４巻第６章、『自然学』第４巻第１０章など。

23 『自然学』第４巻第２章 210b224-26、および第４章 211b21。

24 このことは、場所論における第三の論拠である古代原子論者の言及が示唆する。

[References]

Algra, K. 1995. *Concepts of Space in Greek Thought.* Leiden.

Alexander. 1899. *In Aristotelis Metereologicorum Libros Commentarium* (*Commentaria in Aristotelem Graeca* III 2). Hayduck, M. (ed.). Reimer.

Anagnostopoulos, G. 2009. 'Aristotle' s Methods' . Anagnostopoulos G. (ed.). *A Companion to Aristotle* (*Blackwell Companions to Philosophy*). Wiley-Blackwell. 101-122.

Bolton, R. 1999. 'The Epistemological Basis of Aristotelian Dialectic.' Sim, M. (ed). *From Puzzles to Principles: Essays on Aristotle' s Dialectic*. 57-105.

Burnet, J. 1900. *The Ethics of Aristotle: Edited with an Introduction and Notes.* Methuen.

Cleary J. J. 1994. '*Phainomena* in Aristotle' s Methodology' . *International Journal of Philosophical Studies* 2. 61-97.

Gauthier, R. A. 1958-59. *Aristote: L'Éthique à Nicomaque* (2 vols.). Nauwelarets.

Hamlyn, D. W. 1990. 'Aristotle on Dialectic' . *Philosophy* 65. 465-476.

Hussey, E. 1993. *Aristotle Physics Books III and IV: Translated with Introduction and Notes* (*New impression with correction and additions*). Clarendon Press. (1st published. 1983)

Irwin, T. H. 1987. 'Ways to First Principles: Aristotle' s Methods of Discovery' . *Philosophical Topics* XV, No. 2. 109-134.

Nussbaum, M. C. 1982. 'Saving Aristotle' s appearances' . Schofield, M. and Nussbaum, M. C. (eds.) *Language & Logos: Studies in Ancient Greek Philosophy*. Cambridge University Press. 267-294.

Owen, G. E. L. 1961. '*Tithenai ta Phainomena*' . Moravcsik J. M. E. (ed.). *Aristotle: A Collection of Critical Essays*. 167-90.

Renon, L. V. 1998. 'Aristotle' s *Endoxa* and Plausible Argumentation' . *Argumentation* 12. 95-113.

Shields C. 2013. The Phainomenological Method in Aristotle' s Metaphysics. Feser, E (ed). *Aristotle on Method and Metaphysics*. Palgrave Macmillan. 7-27.

Stewart, J. A. 1892. *Notes on the Nichomachean Ethics* (vol. 2). Clarendon Press.

Wians, W. 1992. 'Saving Aristotle from Nussbaum' s Phainomena' . Preus, A. Anton, J. P. (eds.). *Essays in Ancient Philosophy V: Aristotle' s Ontology.* State University of New York Press. 133-175.

※ 本研究成果は、2015 年 2 月 20 日に東京大学本郷キャンパスで行われた大学院生学術交流シンポジウム「葛藤と和解・主体と他者・普遍と多元」（全南大学・東京大学共催）において、「パイノメナの構造―アリストテレスの方法論の一側面―」として提題した原稿に加筆修正を行ったものです。当日に質疑を投げかけてくれた全南大学および東京大学人文社会系研究科の大学院生および教員に感謝申し上げます。

※ 本研究成果は、JSPS 科研費 JP26770003、JP26284002 の助成を受けたものです。

（まつうら　かずや・講師）